

銀賞

人それぞれの個性を見つけて

横須賀市立常葉中学校一年 大瀬 美希

私は、アルトログリポース（先天性多発性関節拘縮症）を持って生まれ、立つて歩くことができないため、車いすで生活しています。この病気は、両手足に出ることが多いので、両足だけで済んでいる私はラッキーです。触感、痛み、温度、振動などの感覚はあるので、高い所に手が届かないこと以外、工夫すれば日常生活でできないことは少ないです。

しかし、見てすぐわかる足の変形で「どうしてそんななの？」と聞かれたり、じろじろ見られたりすることがたくさんあります。車いすというだけで、常に人の助けが必要な「障がい者」として見られてしまうのです。人より不自由があることは認めるけれど、私は特別扱いされるのが一番きらいです。

みんなと同じ人間なのに……と色々な感情が込み上げてきます。

ある日、家族で車に乗って出かけた時、車いすのマークが描いてある駐車スペースに車をとめたら、となりの車から車いすではない人が降りてきました。どうしてここに車をとめるのだろうと思う、車を見ていたら、母から意外な話を聞きました。

日常的に町中で目にする「車いすのマーク」は、車いすの人のためのマークではないこと。さらに、障がいのある人が優先して使えるという意味でもなくて、「思いやり」で必要としている人にゆずるべき場所であるということを知りました。

見てわからなくても、何かここに車をとめたい理由があったのかもしれない。

私は、「見てもすぐにはわからない」ことを考えてみました。同じ教室で活動する支援級のことです。見ただけでは、どのような障害を持っている

のかかわらない人がほとんどで、一緒に過ごす時間の中で、もしかするとこの人は、こういうことが苦手なのかもしれないと感じたりする時もありますが、本当の事はわかりません。

たとえば、私がエレベーターに乗りたいた時、人がいっぱい待たなければならぬ時もありますが、私の姿を見て乗るスペースを空けてくれたり、わざわざ降りてまでゆずってくれる人がいます。

車いすに視線が集まりやすく、嫌な気持ちになることもあります。見てもすぐわかる障がい者である私は、言葉にしなくても周りの人に気がついてもらえるのです。

そのような日々の出来事を思い返し、私は、すぐに気づいてもらえない障害を持っていて人、見てもわからない体調不良を抱えている人は、本当に大変だろうなと思うようになりました。

「目に見えるものだけじゃない。」

障がい者に限らず、みんな見えない悩みや不安を抱えているのではないでしょう。それに気がつくのはとても難しいことですが、もし身近な人の「何か」に気がついたら相手のために、自分にできることはないだろうかと考えてみようと思います。

一人の人間として私を見てくれる人に出会えた時、とても嬉しく思うのです。見えるところも、見えないところも、人それぞれ違う「個性」だと思うからです。

人と自分を比べてしまうこともあります。自分らしくいることが一番大切なことだと私は思います。